

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

吉状什

表紙 / しおん

美・少・女ヒロイン

デュアルクロス

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『美・少・女ヒロインデュアルクロス 前編』
『美・少・女ヒロインデュアルクロス 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



美・少・女ヒロイン

デュアルクロス

壱状什
表紙 / しおん

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

いしみね

石嶺マコト／デュアルファイア

海聖学園1年。華奢で小柄で女顔だがれっきとした男子。デュアルクロスに選ばれたことで女体化してしまったため、普段は包帯サラシでEカップバストを隠している。

あまみやかたで

天宮楓／デュアルストーム

海聖学園1年。マコトの幼馴染みで、彼の可愛さと優しさに惹かれている。特にマコトの女体化後はその愛情が溺愛にエスカレートしており、彼を困惑させることも多い。

魔将軍ヴェノス

魔人帝国デモニシアの最高指揮官。確認されている魔人の中では唯一の人間タイプで、地上に復活した魔人を制御すべく戦場に赴く。

すめらぎゆうき

住良木勇騎

マコトのクラスの転入生。一見して気品の漂う王子様タイプで、マコトとのツーショットが絵になるためか一部女子人気が高い。

秋から冬に移りつつある、その日の早朝。平和な街を襲ったパニックは速やかに収束しつつあった。一人の青年のサングラスが突如巨大化し、手足の生えた怪物となって破壊活動を始め——今まさに、鎮圧されようとしていた。

「我ら、デュアルクロスの名の下に！」

街を守る超常ヒロインコンビ、デュアルクロスの手によって！

「邪悪なる魔人に、鎮魂の渦を！」

ひとりでに口を衝いて出る言霊をリレーして、二人は繋いだ手を後方へ引き絞った。

「いけーっ、デュアルファイア、デュアルストームーっ！」

ビルの谷間、虚空を踏みしめて構える美少女を、通勤通学途中に事件に巻き込まれた群衆も固唾を飲んで、あるいは拳を突き上げて見守っている。

（みんなが応援してくれてる。ボクたちを信じてくれてる。だからボクたちが守らなきゃ！）

「熾火よ、炎へと燃え盛れ！」

赤毛のショートカット少女、デュアルファイアが声援を背に炎の翼を広げる。くりつとした幼げな瞳は、今は決然と敵を見据えていた。

「微風よ、嵐を巻き起こせ！」

青のロングヘアをなびかせた少女は風の羽を撒き散らす。落ち着きのある伶俐な美貌は、

相棒と指を絡めてふとりラックスした表情を見せる。

対照的な二人は刹那視線を合わせて、互いへの信頼に力強く微笑みを浮かべた。

「グラアアアッ！」

サングラス魔人がスモーククリアの巨体を回転させて、ブーメランの如くデュアルクロスへと飛びかかる。黒光りする体から生えた刃が、美少女の鼻先を捉えるよりも、早く。

「貫け！ クロスバーン・デュエツト！」

解き放った二つの掌から螺旋を描いて光が奔る。炎と嵐、一つに束ねて純化された圧縮魔力光が魔人の胸板に突き刺さり、貫く！

「グラ……ッ、サアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

ドリル状の光の束が魔人の背中を突き抜けて空へと延びる。やがて体の内側から光が四方八方に溢れ出し、サングラスの巨体が膨れ上がり、爆発した！

「やったあ！」「デュアルファイア、かつこいぞー！」「ストームちゃんも綺麗だー！」
人々が勝利に沸く。二人の美を称賛する声も上がり、シャッター音がいくつも鳴った。

「みんな、ありがとうっ！」

紅の美少女、デュアルファイアが高揚に頬を染めて手を振り返す。活動的な髪形とは対照的に目元は優しく愛嬌に満ちているのに対して肢体は肉感的だ。体に密着した白いレオタードと赤いビスチェ状の装甲がEカップバストを強調し、炎の翼を伸ばすために白い背

肌は大胆に露出している。膝上と肘先にそれぞれ装着した長いブーツとグローブが、間に覗く素肌を艶めかしく強調している。

「やったわね、ファイア」

色違いのコスチュームをまとう青の美少女が、繋いだ指を名残惜しげに解く。ヒップやバストは相棒に比べて慎ましやかだが、スマートで均整のとれたプロポーションはクールな美貌と調和を成している。特にツンと突き出すCカップの美乳と谷間の白い乳肌は、ファイアを魅了してやまない——悟られないように気をつけてはいるが。

「うん、みんなを守れた……だけどまだだよ、ストーム」

空中に咲いた紅蓮の炎華から紫色のもやが抜け出し、風に溶けていく。その向こう側で、マントをなびかせ黒曜の鎧をまとった仮面の男が、肩で息をしているのが見えた。

「グラスデモンを、浄化した、か……さすがと言うべき、かな、デュアルクロス」

「魔将軍ヴェノス……魔人帝国デモニシアの最高指揮官が、残ってるっ」

赤のヒロイン、デュアルファイアは気合いを入れ直して拳を握った。

戦いの最中、鎧の男は後方で印を結び呪文を唱えていた。魔人——グラスデモンという名だったらしい——を操っていたのだろう。ヴェノスを叩けば魔人が暴れることもなくなるのではないか。それが、これまでの数度の激突から得た二人共通の見解だった。

「ボクが行くから、援護して」

「分かったわ！」

クール少女が答える。炎のボクっ娘は虚空を蹴って、漆黒の鎧戦士へと躍りかかった。

「逃がさないぞ、ヴェノス！ お前を倒して、ボクは戦いを終わらせる！」

「……ほう、直接対決したいと？ これは光栄だ、デュアルファイア」

鎧の男、ヴェノスは腰にはいた剣を抜くことなく、あえて徒手空拳で少女を迎え撃った。金属音が鋭く響く。鎧の表面で拳を、蹴りをいなされたデュアルファイアは、勢いのまま体ごとぶつかっていった。目元を隠す仮面の隙間から微かに覗く金髪と、色素の薄い唇が、触れ合わんばかりの至近距離に迫る。バイザー越しの視線が、紅少女のそれと絡まる。「こうして間近で話すのは初めてだな、可憐なるファイア。小躍りしたいほどに嬉しいよ」

「っ、誰が！ 気持ち悪いこと言うな！ ボクは、おと……」

「そうよ！」

前衛を務めるデュアルファイアに対し、デュアルストームは支援射撃を得意とする。赤毛ヒロインを見送った彼女は、自らの周囲にいくつもの風の渦を生み出し、組み打つ漆黒と真紅の周囲に配置した。得意技ガストフランクスの予備動作だ。しかし。

「度し難いわ。その子の可愛さを一言で片付けられないで！ ファランクスシユート！」

「へ？ ストーム、何言って……っ！」

真面目な炎ヒロインは味方の発言に虚を突かれ、ヴェノスにはね除けられた。憤りに任

せて直射された風の矢の射線に、無防備に放物線を描く肢体が晒される。

「しまっ……」

「あ……うえっ!？」

ヒロイン二人が息を呑む中、いち早く動いたのは黒鎧の魔將軍だった。炎少女の下へと飛び、手首を掴んで引き寄せて、マントを翻す。

直後、着弾の衝撃が二人を襲った。漆黒のマントの内側で、聖なるコスチュームに守られた豊乳が鎧とぶつかりたゆんとひしゃげ、くびれた腰に腕を回された。耳に息がかかる距離だ。勢い余って両者はくるくるとダンスのように回転する。

「ふう、危ないところだったな。君もだが彼女も相当なおてんばだ」

「え……え？ い、いいから放せっ!」

抱き締められた格好となったデュアルファイアが状況を把握するより早く、ヴェノスは低く張りのある美声で静かに囁く。

「いいや、放すものか。私は君が欲しいんだ。君の中の淫らな毒が、私を狂わせるのでね……おっと、市民たちに嫉妬されてしまうな。気をつけねば」

「……? ……~~~~~っ!!」

あまりに淀みなく告げられたため、耳に染み込まされた言葉の意味を把握するのに数秒を要した。理解して、イメージしてしまった瞬間、少女の顔が炎より赤く染まる。

(ボクのが欲しいって、え、プロポーズ？　ボクが魅力的すぎて悪いとかそういうっ?)

——ギユムウツ。

「んあっ!?　え、何!？」

不意に下半身に痺れが走る。男の手がスカートを乗り越えて尻肉を鷲掴みにしていた。五指が複雑に蠢き、左の尻房を形が変わるほどに揉みしだく。骨盤を伝って全身に電流が走る——気付くと同時に、激情が赤毛少女のキャパシティを突破した。

「な、え、あっ……変態っ!　この、変態いいっ!　放せっ、ボクにそんな趣味はないっ!」
込み上げた怒りの大きさに少女はうまく言葉を紡げず、単純な罵声しか浴びせられなかった。理不尽な敗北感がさらに憤りを加速して、でたらめに鎧の胸板を突き飛ばす。

(体目当て!?　この、ボクのどきどきを返せ……って違う、どきどきなんてしてないっ!)

クールで美形で落ち着いた美声を持ちながら、淡々と男の欲望を見せつける若きセクハラ魔将軍。その衝撃をいなすには、少女ヒロインはあまりに若すぎた。

「ファイアに何をするのっ!　ガストフランクス、フルシユート!!」

「ストーム……あっ!」

青のヒロインは射出した風矢を引き連れて自ら突撃をかけてきた。黒の魔鎧戦士はファ

イアを手放し、ストームの突進を回避する。

「今日のところはここまでにしておこう。君に嫌われるのは避けたい」

「し、心配しなくてもとづくに大嫌いだっ！ ストーム、やっちゃって！」

凹凸に富んだ肢体を庇いながら、炎の少女は相棒に頼み込む。蒼嵐少女は頷いて眼前に魔力ライフリングを展開、一本に収束した風矢砲を解き放った。

「任せて、今度こそ当てるっ。ガストファランクス、クラスタージュート！」

「おっと、気が急いでしまった。ではまた会おう、現代のデュアルクロスよ！」

しかしヴェノスは虚空にかき消える。風矢は空しく彼方へと飛び去っていった。

「逃げるなーっ！ 戻ってきて戦えーっ！ うううう……」

拳を突き上げるデュアルファイアだが、返答はない。力なく彼女は拳を下ろした。脳裏に男の美声が木霊して、つられて描いてしまったイメージが頭から離れない。感覚神経には未だ、桃尻に指を食い込まされた熱さが残っている。

（ううっ、何考えてるんだよお。淫らな毒とかわけ分かんないし、あんなに強くギュッと抱き締めてきて、お尻から電気走っちゃって、まだ心臓がおさままない……あれっ？）

豊乳を抱き抱えた少女は視線を、そっと眼下に向ける。そこにはカメラや双眼鏡を構えて二人を見つめる市民たちがいた。彼らの中には、前屈みになっている男性もいる。

ぞわわ、と悪寒が背筋を駆け抜けた。想像されている。彼らはデュアルクロスを性的な

対象として見ている。レオタードコスチュームの内側を、尻肉の弾力を、妄想されて汚されている、ヴェノスを自分たちに置き換えて——彼らの心理を手にとるように分かるがゆえの、叫びだしたいほどの生々しい嫌悪感を、赤毛少女はぐつと堪えた。

「大丈夫、ファイア？ あんな奴にされたことなんて気にしちゃダメ……」

「い、行こうっ！ 今すぐ、急いで！」

「え？ え、ええ。そうね」

首を傾げるデュアルストームの手を引いて、デュアルファイアは空を駆け、市民の歓声から逃げ出したのだった。

デュアルクロスの二人が着地したのは、あるデパートの屋上だった。開店時間前だったため、人の気配は感じられない。

「ふう……」

デュアルファイアは手にした携帯電話に似たアイテム、デュアルードのボタンを押した。レオタードと装甲が光の粒子となってほどけて、デュアルードのモニターへと吸い込まれていく。入れ替わりに溢れ出した粒子が赤毛少女の裸体を取り囲み、衣服として再生されると同時に、燃えるような髪の色度が下がっていった。

「ん、ふう……っ」

無毛の恥丘とポリウムたつぷりの艶臀をボクサーパンツが覆う。柔らかく弾む乳房に巻き付くのはサラシ代わりの包帯だ。ギョツと胸腰を締め付けられて、呻きが漏れる。さらに男物の学ランとズボン、スニーカーが実体化すると、少女の凹凸が抑制されて少年と言っても通じる格好となった。

（ほっ……やっぱり、こうでなきや）

デュアルファイアこと石嶺マコトは自分の格好を確かめて胸を撫で下ろす。その傍らで感想を漏らすのは、デュアルストームだった少女だ。

「朝っぱらから災難だったわ。それにしても……少しもつたいないわね、その服装」
変身を解いた彼女は、青のブレザーに紺のネクタイといった出で立ちだ。制服に輝く青い校章は二人が海聖学園の一年生であることを示している。

マコトはポケットにデュアルードを仕舞い込み、怪訝に眉をひそめた。

「もつたいない、つて……楓？ ボクが？」

「だってそうでしょう」

デュアルストームこと雨宮楓は、青から黒へと戻ったロングヘアをかき上げ、力説した。「顔も可愛い、胸も大きい、その上みんなに優しい完璧な女の子なのに、学ランだなんて絶対女子制服の方が似合ってる。普段から変な男に狙われないのはいいけれど……」

「あのさ、楓。忘れてないよね。ボクたち、5歳の時からの幼馴染みだよね？」

疲れたような学ラン、少女の物言いに、楓は頷き、遠くを見つめた。

「そうよ。あの頃からマコトは可愛かったわよね。私の後をいつもついてきて……」

「じゃ、なくて！ ボクは男なんだよ？ 今はデュアルクロス力でこんな風だけど！

普段まで女の子らしくなってるのさ！ こうなりたいきさつとか忘れないでよ!!」

腰に手を当てて、マコト——性転換ヒロインは幼馴染みに、本来の性別を全力で主張した。

一週間前のことだ。彼らが通う学園の裏山、その地下深くに封印された古代の魔人が現代に蘇った。彼らの精神は地上の器物に乗り移り、破壊の限りを尽くそうとする。

「魔人を倒すために、ボクたちはデュアルクロス力を遺跡から与えられて、何でか勢いでボクは女の子になっちゃったんだ……だから早く魔人を全滅させて男に戻るんだ。そして楓だって分かってくれるはずなんだ。諦めるなボク。頑張れボク。負けるなボク」

ぶつぶつと自分に言い聞かせるようになっていくマコトに、楓がやれやれと首を振る。

「……マコトが男でも女でも一緒にいてあげるのに。そんなに女の子が嫌なの？」

「普通に嫌だよ!? あ、その、楓と一緒にいるのが嫌って言うんじゃないかって、えっと」マコトは思わず声を上げて、慌てて打ち消した。

（楓は、ボクに女の子でいてほしいのかな……人の気も知らないでさ）

ため息をつく、幼馴染み少女が心配そうに表情を覗き込んできた。

「どうしたの？ やっぱりさつきのが……お尻、さすってあげようかしら？」

「う、ううん、それはいらなから！」

元・少年は勢いよく顔を背けた。密かに想いを寄せる少女に尻をさすってもらうなど、一週間前まで童貞少年だった彼女には倒錯的すぎてたまったものではない。

(うう……想像しちゃったら、今から学校なのに変なむずむずがあ……)

股間から妖しい電流が這い上ってくる。マコトは努めて意識しないように声を上げた。

「そ、それより、早く学校行こうっ！」

「そうね。速攻で片付けたから、多分学校も休みにならないだろうし」

静かに微笑んで、黒髪少女が学ラン少女の腕を取る。マコトは瞬きを繰り返した。

「……えっと、これは？」

「あんな悪者にまた変なことをされないか、心配だから守ってあげる」

清楚で通っている長身の黒髪少女は使命感に目を輝かせている。やけにひたむきな顔を微かに見上げる元・少年としては、彼女の要求を突っぱねられるものではない。

(ああもうっ。断れないってこと、絶対分かってやってる！)

不満はあれど、彼女に構われているのは心地よいのだ。二の腕から感じる幼馴染みの柔らかなさに役得を覚え、そんな自分を恥じながら、性転換少年は諦めて引きずられていく。

一方で、彼の肢体は無意識のうちに、抱きすくめられた感触や尻房を鷺掴みにされた熱さを思い出して、比較してしまった。あちらの抱擁は強く、逞しかった。

(……ってだめだ、あんなの。相手は男なんだし気持ち悪いんだし、忘れようっ！ 楓の感触に集中しよう——ってそれも最低じゃないかボクのばっかっ！)

意識すまいとすればするほど、意識してしまうのが人の性だ。幼馴染みの美少女の、パランスよく育った美乳が二の腕に押しつけられている。気心の知れた仲だからか、少年が女体化しているからか、その密着度合いはあまりに無防備だ。

——ずくんつ。

「マコト……どうかした？」

「んっ？ う、ううん。何でもない。何でもないから放してつてば」

体の奥底で未知の感覚が疼くと同時に、女体化少年は冷や汗をかいた。男に抱擁されたオナナの感覚と、女に抱きつかれるオトコの感覚。どちらに転んだとしても——失われた男性器の代わりに、頭をもたげる何かに注意を払わないわけにはいかなかった。

「おはよう、みんな……もういいよね楓、放してつてば。恥ずかしいよ……」

サラシで押しつぶした上から学ランを着れば、Eカップ巨乳も意外と隠れるものだ。

楓がマコトの腕を取って引つ張っている構図は、それゆえ傍目からは人目もはばからずいちやつくカップルの類にしか見えない。生温かい視線が二人を迎えた。

「ほんと、雨宮さんと石嶺くんって仲いいよね」「ぬふふ、朝から見せつけてくれますなあ」

「当たり前でしょ？ 私とマコトの仲なんだから」

クラスメートの女子の冷やかしに、黒髪美少女はドヤ顔でどこかズレた言葉を返す。心優しい女顔少年と何かと世話を焼く少女の組み合わせは、入学後半年にしてすでにクラス公認カップルとして見なされている。そんな眼差しをよそに、少年は追い詰められていた。（はあ……どうしよう。じんじんしてるのって、やっぱりクリトリス……だよな。女の子も、えっちなことを考えたらやっぱり、勝手に勃っちゃう、のかな）

充血しだした敏感突起が、歩きたびに微かに刺激されて徐々に体積を増しつつある。膨張に比例して感度も増すので、よけいに刺激される悪循環に陥っていた。

（男だつて女の子に抱き締められたらどきどきするし、えっちな気持ちになるし……そんなこと、どっちにしても楓に相談できるわけないよ。放っておくしかないよね、うん）

マコトは自分を納得させ、独力で体の異常をやりすごそうとする。その目の前に、ぬつと端正な顔が迫ってきた。

「今日も君たちは仲がいいんだね。おはよう、マコトくん、雨宮さん」

「うわあっ!? ……あ、住良木くん、おはよう。ごめん、驚かさないですよ……」

「あらおはよう住良木勇騎。今日も楽しそうね」

驚いて仰け反るマコトとは対照的に、楓は落ち着いて挨拶を返す。第三者の乱入で解かれた手を恨めしげに見つめながらなのでどこか怖い。

「そう、言われてもさ……あつ」

木下が何かに気付くと同時に、臀部に食い込む白布へと一本の触手が潜り込んできた。「えっ……んひいっ！……ちよっ、何、これえっ！こ、こらっ、やめ、あああつ！」触手を払おうと伸ばした両手が、ひとまとめに拘束されて背後に引つ張られる。突き出されてぷるんと揺れるしつとりとした豊乳の谷間にも、別の触手が潜り込んでいった。

「やっ、やめて、そこは……あうんっ！」

感度の収まっていない乳肌に冷たい蛇が這い回り、思わず鼻にかかった声を上げてしまう。瞬間、檻の内側がどよめいた。

「お、おい、今のって」「そんなまさか……やっぱり、なのか？」

「ち、違うよっ、だから見ないで……やっ、やめてよおっ！」

身をよじっても、足の拘束は小揺るぎもしない。それどころか鉄縄に侵入された胸を揺すって、男たちの関心を引いてしまうだけだ。

「ずにゆる、にゆりゆんっ！」

有機的に伸縮する不思議な金属触手が、コスチュームの内側を這い回りながら左の乳房に巻き付いていく。理性で抑え込もうとしていた性感のポルテージが再び高まっていく。柔肌を擦られる刺激と同時に、数分前の官能の記憶が呼び起された。

未だ満たされていない女体が、気持ちよかった刺激を次々と追想する。例えば豊乳房は、

根元から絞り出すようにいじると気持ちよかった——。

「あつ、やめ、ダメ……っ！　お願い、それだけはだめ！　先つば、は……っ！」
にゆるる、ぷりゅうっ！

哀願も空しく鉄縄は自ら収縮して、片乳房を根元から先端に向けて激しく絞り上げた。

「んあ……っ!?　ダメっ、だめだめ……っ、イッチャ……ああああアアアッ！」

熱を持って渦巻いていた熱い何かが全身に突き抜ける。頭の奥で何度も爆発が起こり思考が白く染まる。乳房から中枢神経に流れ込んだ快感が、体の中を暴れ狂う。熱い疼きに苛まれていた雌臓器が絶頂に解き放たれて悦蜜をこぼすと、発情臭が広がった。

「うおっ！　また漏らした」「うそ、デュアルファイア、まさかイッチャったの？」

「あつ、んあつ、あひ……はあつ！　そんな、ボク、みんなの前で、イッて……」

男の絶頂とは桁違いの暴流が、性転換ヒロインの意識を激しく揺さぶる。男の射精の刹那的な解放感とは違う、全身を煮立った湯で浸したような持続的なエクスタシーだ。その密度と圧力は、ファイアの脳のキャパシティをはるかに超えていた。

（こらえたのに、力入れたのにつ、イッチャったあ……さっきのより、すごい……）

トイレでの手探りのオナニーや中途半端なアクメとは比べ物にならない。体中が破滅的なほどの幸福感に満たされて、一気に力が抜ける。ガクンと顎を反らし白い喉を見せる絶頂ヒロイン。その表情はだらしなく緩み、口の端から涎が逆さに垂れた。

「あ、あんな風にされて……キモチイイ、の?」「すっごい漏らしてる……」
「っ! ひ、う……っ!」

誰かがひそひそと囁きあう。我に返った少年ヒロインは、視線から逃れようともがいた。
(やだ、見られて、あんなこと言われて……っ、でも、気持ちよくなって……んえ?)

折れそうな心のまま見上げる。檻に手をかけかぶりつきで責められヒロインを見つめる
男たちのズボンが、勇壮にテントを張っていた。ふわ、と青臭い匂いが滑りこんでくる。

「だ、だから、見ないでえ……っ! こ、興奮、しちやだめだよお……!」

「だけどき、これは」「ファイアちゃん、エロい……」「やだ、私も変な気持ちに……」
力なくもがくが、媚粘膜から蜜壺の最奥へと突き刺さる快感が抵抗を許さない。

どうにかして脱出しなければともがくが、絶頂を迎えた体には力が入らない。Yの字拘束から抜け出せない。触手は無慈悲に少女の性感を掘り起こしていった。

「うお……もう少して、見えそう」

「っ! み、見ないでっ、お願い見ちゃダメっ! んあっ、ひへえっ!」

こぼれ落ちそうな乳房に、布地を変色させる陰唇に、視線が集まっていく。少女が断続的に絶頂するたび、コスチュームの隙間から蒸れた芳香が広がって、男たちを惹きつける。

「ぐちゅぐちゅって言うてる……」「んっ、ふう……触手……」

女子の囁きの中にも甘いものが混じって、女体化ヒロインのオトコの部分が反応する。

様子がおかしい。興奮が異様に広がって、クラスメートたちを異常事態に順応させている。ズクン、ズクンッ!

「ンっ、はあ……アッ! また、ああアアアアッ!」

嬌声が裏返る。脈動する陰核が震えて、沸き上がる熱が胎内をぐずぐずに溶かしていく。(ううっ、あれだけでイッた……っ? クリが、おつきくなつて……飛び出しそう……っ)

「だ、大丈夫かファイアちゃん……」

「だい、じょうぶう……っ!」

木下と目があつて、なんとか安心させようと笑みを浮かべる束縛ヒロイン。だが、快楽に蕩け崩れた微笑が少年たちをさらに興奮させてしまうことに気付いていない。

すでに魔人は捕まえた生徒をそのままに、残る触手で炎の少女をいたぶる姿勢だ。

「なあ、やつぱり……勃ってる、よな」「乳首もクリも、大きめなんだ……」

「だ、だから見ないで、いわないでっばあっ! んあっ、ひああっ!」

薄布越しに分かるほど屹立した雌突起を見つけられた。しかも評価までされる。恥辱に次ぐ恥辱に悶えるヒロインに、さらなる魔手が迫った。

グイ、グイ……。コスチュームの内側で金属触手が、領地を広げるように身じろぎした。「ひやつ、ふえああ……やだ、やだやだ、やだあっ!」

(まさか、まさかっ! はやく、魔人の本体を見つけないきゃっ、魔人の、んはあっ、こす

れて、るっ！ からだ、ゆるむう……、みられるの、だめえっ！)

破滅的な予感に、デュアルファイアは必死で逆転の一手を探る。だが思考する先から快楽に吞まれて、混乱の度を深めていく。淫悦から逃れられない。

そして——ぷりゅんっ。とうとうクロッチがずらされて、無毛の秘丘が晒された。それだけではなく、細く枝分かれした触手がほころんだ陰唇に群がり、左右に割り広げていく。「あ、うぐ………うううううう！ やだ、やめっ、やめてっ、もどして、やだああっ！」束縛ヒロインのものがきもものともせず、細く冷たい触手は鮮紅色の粘膜を、蜜の滴る膣口を、そしてその奥の処女膜をもギャラリーに見せつけた。

「綺麗なピンク色してんじゃん……」「すげえ濡れてる……」「処女、なんだ、やっぱり」「ひあ……っ?!」

(見られたっ、ボクの、男なのにつ、女の子のおま〇こ、全部見られたあああっ！)

男女の声が、虚ろに昂る。口々に批評する彼ら彼女らの口ぶりが先刻から妖しい。生命の危機そっちのけで情欲に吞まれている。だけどヒロインに気付く余裕はない。

「ひぐっ、うええっ、ひどいよお、みんなあ………こんなやだあ……っ、んああっ?!」

たぶんっ、と巨乳房もまとめてまるびでた。すぐさま触手が殺到し、乳量ごと膨らみきった雌イチゴを巻き上げ、引っ張る。乳球がゆがむ痛みは、快樂信号に変わって広がり、連動するかのよう濡花卉を脈打たせた。戦意が砕け、情けない声を響かせる。

鋭い刃にも似た雄叫びが大音声で響く。黒銀の閃きは縦横に駆け巡り、変異スチールの触手を悉く切り裂くと、宙に投げ出された陵辱ヒロインを抱きとめて着地した。

鎧の硬質な凹凸が柔肌に食い込む刺激に惚けながら、解放ヒロインは救援者を見上げた。

「んえ、ふう……っ？ つ、お前……なんで、え……」

「話は後だ。下から来られればよかったのだが、ここは一階。上しか空いていなくてな」

黒鎧の乱入者はヒロインに優しくマントをかけると、大剣を持ち直して触手に向き直る。

「理性喪失もここまで行き着けば是非もなし。再び眠りについてもらうぞ、同胞」

「おまえ、が……？ 操ってたんじゃ、ない、の……どうして、こんな……んあつ」

救いの手をもたらししたのは、デュアルストームではない。宿敵であるはずの男、魔將軍ヴェノスの広い背中を見つめ、デュアルファイアの胸は不思議な高鳴りを覚えていた。

「ヴェア！」

「うわっ！」「キャア!?!」

縦一文字に振るわれた大剣が檻を断ち切り、衝撃波で囚われの生徒たちを左右に押しやる。彼らが戻ってくるよりも早く、ヴェノスは剣を逆手に持ち替えて。

「魔魂浄還、ヴェノスライド！」

檻の床板——机の天板の集合体に切っ先を突き立てた！

刹那、すべての触手が力を失い、吊り上げたまま放置していた生徒たちを取り落とす。

ドクンドクンと脈打つ淡い光が末端から根元へと走り、黒曜將軍の劍へと集まっていく。

「——ザアリアアア！」

鋭い咆哮とともに、魔將軍は光で満ちた劍を振り上げた。スイングの勢いで光がいずこかへと飛ばされていく。それと同時に銀の触手たちも急速に収縮し、あっけなく元の机と椅子の姿を取り戻して無秩序に積み上がった。

マントを抱き寄せながら、赤毛ヒロインは宿敵であるはずの男を見上げ、とぎれとぎれに問いかけた。

「どうし、て……何で、お前が親玉じゃ、なかった……の……?」

ヴェノスは劍を収め、振り返る。仮面に覆われた目元には、どこか優しげな光があった。「話せば長くなるが……あんな暴走で自我を失った魔人に、君を渡したくなかった」

「うぐ……、ば、ばかなこというなあ……っ、く、うう……っ!」

声は優しく、予想以上にデュアルファイアの心の奥まで響いて染みだした。涙と一緒に感情が溢れ出す。嗚咽を一つ漏らすたびに、戦意や警戒心といったものも流れ出していく。

(だめだ、泣いちゃだめなのに、敵の前なのに……まだ助かってないのに……っ)

黒い布地を掴んで自分の身をくるみながら、ファイアは涙声で抗議した。男は跪く。

「ああ、魔人のしでかしたことである以上、私の責任だ。どうか謝罪させてほし……落ち着きたまえ。私は君と話をしたいんだが」

「……っ、そんなこと言ったって、誤魔化されたりなんか……絶対、絶対許さないからなあ……っ、うぐっ、ひぐう……うあああうっ！」

「デュアルファイア……その、すまなかつた。怖かつた、かい？」

飾りのない声に心の堰を崩される。千々に乱れるままに、マントの隙間から拳を叩きつける。ぽか。ぽかぽか。マントを押さえていない方の手で、力なく何度も彼の胸を打った。「怖かつたのにつ、悔しいのにつ、みんなに見られて、体が言うこと聞かなくて、かえ……ストームも来てくれなくて……何でお前が助けたんだよお……わけ分かんないよおつ」殴りつけるたびに拳の勢いは弱々しくなっていき、やがて嗚咽が彼女のすべてを満たした。

「辛い思いをさせた。だが、私は敵対するつもりはなくて……ああ、参つたな……」

優しく抱き締められる。机や椅子が散乱する教室で、惚けて立ちつくす生徒たちに囲まれて、ヒロインは魔將軍の腕の中に招かれる。禁断の安息がそこにあった。

「ひぐ……えう、えう……信じられないよ……っ、そんな証拠、ないじゃないかあ……っ」

「証拠か……仕方ない、失礼するよ……んっ」

温かなものが、壊れたデュアルファイアを浸していく。力なく抗い、濡れた瞳で睨みつけようとした少女の唇を、ヴェノスが静かに塞いだ。

「んっ？ ……うっ、ん、ふうっ、ンンンウウウ!!」

目を見開き、ゆるゆるともがく女体化少年だったが、青年將軍は怯むことなくヒロインのファーストキスを味わった。

「んぶあつ、ない、しゆる……んうううっ！」

一度離れた唇が、また覆いかぶさって緩んだガードを解いていく。セカンドキスも奪われながら、女体化ヒロインは男の腕の中で震えた。

（うあつ、キス、されてる……っ!? 体が、また熱く、なつてえ……っ、舌入ってきたっ、にゆるにゆるされるっ、追い出さなきゃ……っ、んああつ、おなか、おなか奥うっ!）

電流が走って弛緩した体に一瞬活力が戻り、それ以上に蕩けさせられる。

男の舌が、ファイアのそれを絡め捕る。味覚器官の神経を優しくねぶられ、体の芯がカッカと発熱する。まるで直接舐めほじられているかのように、胎内の最奥が疼いた。

「ん……っ、んちゅっ、んぢゅるっ、んぶむううう……っ!」

流し込まれる唾液をなすすべなく飲み下す。キスアクメの連続で思考がぼやける中、男の両腕を覆う鎧が細かく折り畳まれるように消失するのを、視界の端でぼんやり捉えた。

「ん、ふう……んゅっ、ふにい、んふああ……」

（ふわ、ボク、こいつにおっぱい、もまれて……やだ、手つき、優しいよお……）

マントに潜り込んだヴェノスの両腕が、腫れあがる乳肌を慎重に撫でる。乱れていた血流が正しいリズムを取り戻し、染み渡る熱さが鉄縄の痕を癒やしていく。暴力的な熱さで

はない温度に、赤毛ヒロインは陶酔していく。

「ン……っ、んちゅ……っ、ふウン……っ♪」

強張っていた体がほぐれていく。頭の奥がジンと痺れて、全身を弛緩させていく。疲弊していた少女少年の精神もまた、ぬるま湯に浸されたように溶けていく。ぐらぐらと揺れる意識の中で、腹部の奥が熱を宿す。

「ン、ム……こうすれば落ち着いてくれると書籍で読んだのだが……デュアルファイア？」
「ふえ……、少し、おちついた……け、どお、んあつ、ふう……んうう……」

唇を解放されると、体中が物足りなく感じた。蕩けたヒロインは焦点の合わない瞳で頭を振る。確かに感情の爆発は収まっていた。子供のように泣きじゃくることも、当たり前散らすこともない。だが、体は一向に落ち着いてくれない。

（おなかのおく、よけいにぐちゅぐちゅう……っ、かってに、うねって、んはあ……♪）
息を吸い、吐く。狂乱から解放された思考を、入れ替わりに絶頂感が侵していく。このままずっと、身を浸していたい。気付けば、甘ったるい声でなじっていた。

「今の、ボクの、ファーストキス……う、だったん、だからあ……」
「……そ、それは……すまなかつた」

（そうだ、ファーストキス、奪われちゃったんだ……いっばいいいっばい、ちゅーされたんだ……あううう、またおなかのおくが……ぱくぱく、してるう♪）

口に出して自覚する。目の前の男が密かに狼狽しているのが、どこか可愛く見えた。それでいて自分から視線を外そうとしない彼を、愛おしく感じてしまう。

「あのね、ヴェノス。ボク、おなかのおく、うずうずが、ぐちゅぐちゅでえ……♪」

「そう、なのか。私のせいで、君が……乱れて……つぐ……つぐ……?」

男を困惑させるのが楽しい。視線を集めるのが——嬉しい。悦楽に壊れた体でなじりながら縋りつく。芽生えた感情を、確かめる前に掠れた声で吐き出す。

「そう、だよ……こうなったの、お前のせい、なんだからあ……敵じゃないって、言うなら、せきにん、とって、よお……」

体が収まらない。胎内を暴れる切なさに、狂ってしまったそうだ。だから、支離滅裂と分かっている、炎のヒロインは求めずにはいられなかった。

「責任っ? ……その、私は、何をすればいいのか、な……?」

「ん……分かってるくせ、にい」

デュアルファイアは戸惑うヴェノスにしなだれかかる。体重を預けられた鎧戦士は尻餅をついて、発情女体を抱きとめてくれた。そんなさりげない優しさに胸がときめく。

「……ねえ。悪いって思ってるなら、ボクを助けて……ヴェノスう……」

甘えた声で体の求めるままに動く。熱を帯びた右手で男の下半身を撫でると、鎧の腰当てが左右に分割され、アンダースーツに切れ目が入る。黒光りする陽根が、まろびでた。

「私の鎧が、勝手に……っ？ うぐ……いいのかい、このままでは、本当に……っ」

すでに誤魔化しようのないくらい、熱く逞しくそそり立つそれに、唾を飲み込む。ズレたレオタードから露出したままの淫唇が涎を垂らした。

「こんなにおつきくして……ヴェノスも、苦しそう、だよ？ 一緒にすつきり、しよ？」
「……ああ、そうだな。君を私のものにして、責任をとろう……っ」

最後の一押しで鎧騎士が折れる。たまらなく溢れる愛しさのまま、炎少女は微笑んだ。
「うん……ヴェノス……ボクを、奪って……っ っばいイかせてえ……っ」

膝立ちのまま抱きあうと、亀頭が処女粘膜をくすぐる。ふやけた秘唇は浅ましく吸いついた。くちゅり、と蜜がかき混ぜられて、炎のヒロインはふわっと目元をほころばせる。

（ああっ、きちやう、きちやうなんだっ。あんな太いのが、はいつて、ボクのことっ）

浅瀬を亀頭で搔かれるもどかしい快感に表情が緩む。だけでもっと気持ちよくなりたくて、本能が命じるままに女体化ヒロインは腰を落としていった。

ずっ、ずちゅ……ッ。

少しずつヴェノスが腰を進めて浅く抜き差しする。優しく、もどかしく。顔を上げた少女の唇を、もう一度男が奪う。今度はファイアから腕を回して、汗ばむ乳房を押しつけた。初めて迎え入れるべき主に触れて、膣粘膜が歓喜にわななく。結合部から蜜が溢れて剛直を濡らし、雌褻の蠢きと合わせて挿入を助けた。

「んはあ、ちんちん、とうとう入っちゃうんだ……っ♪」

ほんの入り口を拡張されただけで雄槍の存在感に参ってしまったが、もつと奥の肉室が刺激をねだって仕方ない。剛直に愛蜜をまぶして、挿入を深める。

(すごい、おつきい、まだほんのちよつとはず……ん、ああ、何か、あるう……) 自分の中に押し入ってくる異物感に酔いしれる中で引っかけりを覚えた。処女膜だ。

「ヴェノスう、ボクにもつとちゅー……んう」

唇を塞がれて、デュアルファイアは首を微かに縦に振る。ヴェノスは行動で応えた。

ずちゅ、ずぬぬ……ぶづ、ぶぢい……っ！ ずじゅずずっ！

「んう、くふううう！」

(あはあ、やぶれたあっ♪ まく、やぶれてっ、いだきもちいいっ♪)

淫悦に溺れた心身は、最初で最後の痛みすらも極上の快感として貪る。足から力が完全に抜けて、重力に任せて腰を落としていく。

ずぶぶぶ、ごづつ——ずちゅうっ！

「……っ、ん、ふ……っ！」

最奥に突き当たった剛棒は、構わずさらなる奥を目指して突き上げる。幾度ものアクメで降りてきていた子宮のすぼまりを正確に捉え、力強く揺さぶる一撃に、処女喪失ヒロインは声すら失って目を見開いた。唇が離され、男が問うてくる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>